

1. はじめに

土橋遺跡では、令和元年度分の調査が3月13日に終了しました。今年は降雪量は少なかったものの雨の日が多く、泥だらけになりながら調査を行いました（第1・7図）。



第1図 発掘調査のようす



第2図 配石遺構（はいせきこう）の検出状況

2. 発掘調査の状況

配石遺構

こぶし大の石を楕円形に並べた配石遺構（はいせきこう）が見つかりました（第2図）。楕円形の先端には、底を上にした逆さの土器が出土しました。土器を逆さにする例は、死者の頭に土器を被せたとも考えられ、甕被葬（かめかぶりそう）などと呼ばれています。こうしたことから、見つかった配石遺構は、お墓である可能性もあります。

土坑

調査区では、土橋遺跡の縄文人が掘った大きな穴：土坑（どこう）が見つっています。写真の土坑の底からは、小型の壺・注口（つぼ・ちゅうこう）土器と石がセットで出土しました（第3図）。出土状況から、石で蓋をしていた可能性が考えられます。

柱穴

B区西側からC区にかけて、建物の柱穴がたくさん見つっています（第4図）。今後は、柱の対応関係を調べて建物の規模や形を復元する必要があります。



第3図 土坑（どこう） 遺物出土状況



第4図 柱穴 検出状況

【参考文献】

十日町市博物館 2015 『縄文後期の墓 栗ノ木田遺跡』

3 出土遺物

たより 11 月号では、土偶の一部が出土したことをお伝えしました。その後、土偶の顔が出土しました（第5図）。写真の土偶は、「ハート形土偶」と呼ばれるもので、福島県阿武隈（あぶくま）地域が中心地であったと考えられています。このほか、「キノコ形土製品」あるいは「スタンプ形土製品」と考えられる遺物も出土しました（第6図）。キノコ形土製品は、青森県など東北北部を中心に出土しています。用途については不明な部分が多く、「儀礼に用いられた」あるいは「キノコは毒を持つものもあることから、判別するための図鑑として作られた」などの説があります。

このように、土器や石器だけではなく、土偶や土製品からも、様々な地域との交流があったことを知ることができます。

4 まとめ

これまでの調査で縄文時代の土橋遺跡では、東北・関東の人びととの交流が盛んに行われていたことがわかりました。

遺跡内では、広範囲に地面が焼け、微細な骨片がたくさん出土しました。この土について自然科学分析を行った結果、魚類よりも哺乳類が多いこと、植物種子・種実が少ないことがわかりました。土橋遺跡の縄文人の食生活を知る手がかりにもなります。

また、B～C区では、柱穴やお墓と考えられる遺構が見つかり、「場」の性格が変わり始めます。今後は、土橋遺跡がどのような「場」であったのか、さらに詳しく調べていきたいと思えます。



第5図 土偶の顔



第6図 キノコ形土製品



第7図 下面 B～C区完掘状況